

目

次

1. 調 査 概 要	1
2. 調査対象地域図	2
3. 山梨県の植生概説	3
4. 凡 例 解 説	10
5. 植 生 調 査 表	43
6. 資 料 リ ス ト	156
7. 調査担当者名簿	159

1. 調 査 概 要

山梨県土は 4,464 平方キロで、国土地理院の五万分の一地形図では 22 枚にまたがっている。今回第三回調査ではこれを 4 年に分けて植生調査と植生図化を行った。実施年度と地域は次のとおりである。

1983 年（昭和 58 年）

甲府及び峡南地方、図幅名・甲府、身延、南部、富士宮、清水、赤石岳

1984 年（昭和 59 年）

富士及び郡内地方、図幅名・富士山・山中湖、秦野、上野原、都留

1985 年（昭和 60 年）

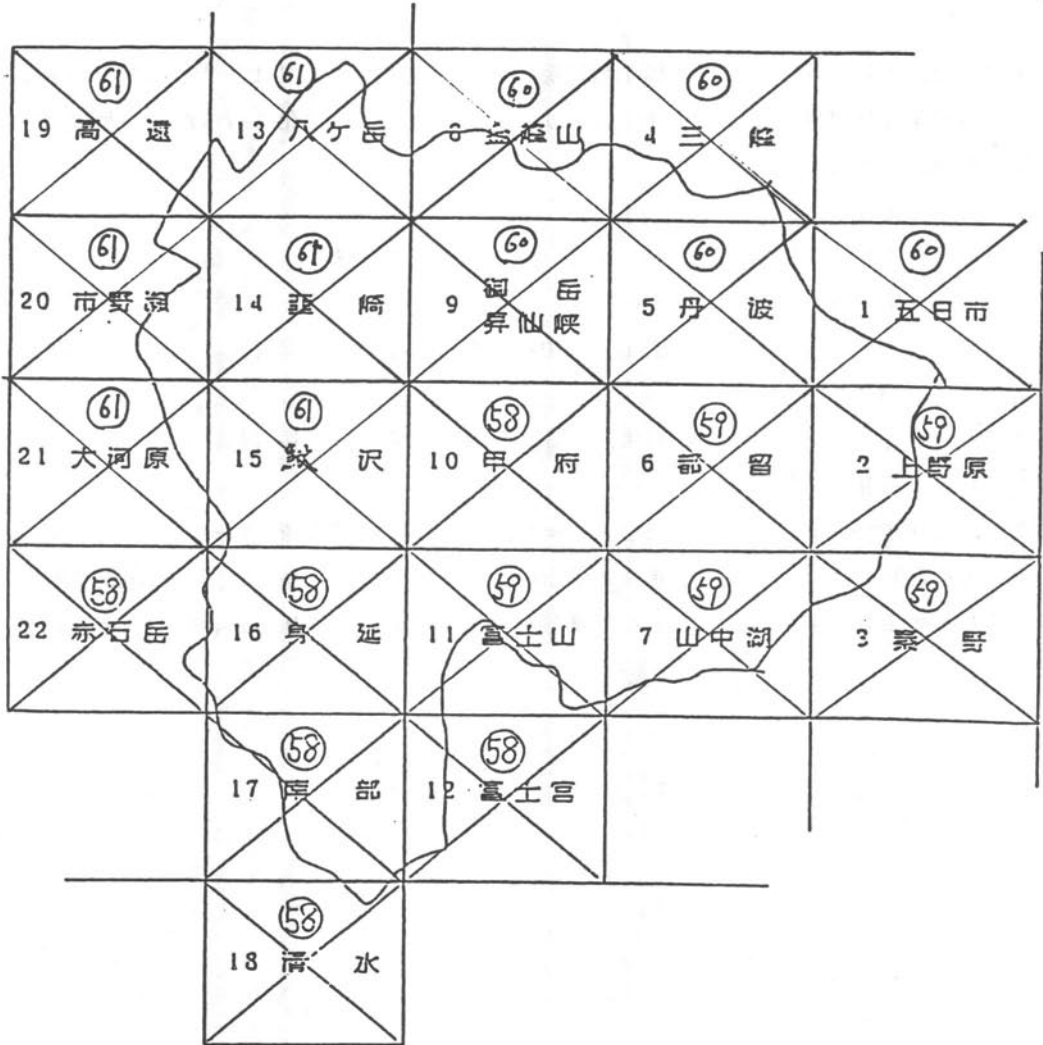
秩布山塊地方 図幅名・五日市、三峰、丹波、金峰山、御岳昇仙峡

1986 年（昭和 61 年）

八ヶ岳及び南アルプス地方 図幅名・八ヶ岳、韭崎、鯨沢、高遠、市野瀬、大河原

調査方法としては、できるだけ重要な場所については現地調査を行い、その他航空写真、昭和 58 年度山梨県土地利用図、また本県各林務事務所管内の森林計画書等も参考とした。

2. 山梨県調査対象地域図



3. 山梨県の植生概説

(1) 気 候

山梨県は周囲を山岳に囲まれ、域内には山あり、谷あり、盆地ありという複雑な地形である。気候も所によって異なった変化を示しており、概略的に記せば内陸的気候の代表的な地域であるといえる。

冬の寒さや、夏の炎暑はとくにきびしく、気温の較差の大きいことは本邦内の代表的なものである。

空気は乾燥し、降雨量は少なく晴天が多い。したがって日照時間が多く、風は冬季には北西の季節風が強く、夏季は南東風が主風となるが、風速は弱い。

また昼夜の気温、湿度の変化が大きく、一般に厳しい気候を示している。

地域的に見れば、南都留郡、北都留郡地方は高原的な気候で気温は低く、降水量は南巨摩郡、西八代郡地方とともに 2,400 mm に達し、本邦内地における多雨地域である。また盆地を囲む四周の山岳地帯も気温が低く高冷地に属し、降水量は 1,500 ~ 2,000 mm に達している。中央の盆地部およびこれに続く富士川沿岸地方は県内における高温地帯で、県南部付近では海岸的気候を現わし、気候に温和である。

山梨の気候は、日本の気候型からは表日本型のうちの中央高原型に属する。さらに地形、海拔、高度などを考慮すれば、内陸気候であって甲府を中心とした盆地は盆地気候、富士山麓地方および四囲の山岳方面は高原気候を現わしている。

本県を気候的に区分すると次のようになる。

- 少雨高温区：甲府盆地。
- 多雨高温区：甲府盆地以南の富士川流域。
- 中雨高温区：大月、上野原を中心とした桂川流域
- 少雨冷涼区：八ヶ岳山麓の高原から甲府盆地以北の山岳地帯
- 多雨冷涼区：富士五湖地方、西部山岳地帯および丹波川上流地域

(2) 地 形

山梨県は日本アルプスの位置する中部地方の南東部で、南北の長さ 92.7km、東西の幅 80.6km、総面積が 4,464 km² で、これは全国総面積の約 1.2 % にあたる。県庁所在地は甲府市丸の内一丁目で、北緯 35 度 40 分、東経 138 度 34 分 29 秒、標高は 274 m である。

山系は北部か東部をめぐらず関東山地、西部には日本アルプスの南アルプス（赤石山脈）と巨摩山地が並列している。東部には御坂山脈、丹沢山地がそびえている。御坂山脈を分水嶺として西側を国中地方といい、東側を郡内地方と呼んでいる。国中地方には典型的な甲府盆地がある。南部には天子山脈、十枚山地、巨摩山地の続く富士見山、南アルプスの笹ヶ岳などがある。

中央部に甲府盆地をいだし、北西から斜めに南東への線上に八ヶ岳、茅ヶ岳、さらに富士山などの火山地域がある。

水系は国中地方を流れて駿河湾に注ぐ富士川水系と、郡内地方から相模湾に注ぐ桂川水系、県の北東部では多摩川に注ぐ丹波川、小菅川がある。

山梨県の地形の特徴を要約すると次のようである。

第1に摺鉢形地形をしている。周囲が山岳に囲まれて高く、中央が凹地となっている。

日本一を誇る名峰富士山を有する富士箱根国立公園、北岳を主峰とする南アルプス国立公園、金峰山、国師岳を連ねる秩父多摩国立公園と、八ヶ岳火山列の八ヶ岳中信国定公園とからなる。その内側は楕形山、夜叉神峠の県立巨摩自然公園があり、中央凹地となって甲府盆地となっている。御坂山脈の四尾連湖は県立四尾連湖公園となっている。

3つの国立公園、1つの国定公園、2つの県立自然公園という恵まれた自然環境は全国的にもその例をみないといえよう。

県の西部を例にとると、3,000 m級の南アルプスには北岳(3,192.4 m)、仙丈岳(3,032.7 m)がある。

2,000 m級の巨摩山地には楕形山(2,051.7 m)、千頭星山(2,138.5 m)がある。400 m級の市之瀬台地が、甲府盆地に接している。250 mから450 mの甲府盆地が摺鉢型地形の底面となっている。

比高差は北岳と甲府盆地では2,900 m余になる。赤石山脈、巨摩山地、市之瀬台地、甲府盆地の境界は断層によるもので、早川を通る糸魚川—静岡構造線はフォッサ・マグナ(Fossa magna)の西縁を画する顕著なものである。楕形山断層、上市之瀬断層、下市之瀬断層がある。

国立公園、国定公園には富士山、白根山、仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、鳳凰山、八ヶ岳、金峰山、国師岳などの日本の名山が連なっている。

第2に典型的な甲府盆地を有する。韭崎、鰍沢を底辺とし、勝沼を頂点とする二等辺三角形である。盆地の西側は市之瀬台地、南側は曾根丘陵、北部は甲府北部火山群からなる。

これらの丘陵、台地、火山地形と甲府盆地は断層で接している。

第3に北部に関東山地が東西にのびている。金峰山(2,595 m)国師岳(2,591.8 m)甲武信岳(2,460 m)雲取山(2,017.7 m)の主峰から南部の大菩薩嶺(2,056.9 m)の諸峰には古生層、中生層の四万十層群が広く分布している。これを貫いて花崗岩類(深成岩類)が広く分布する。金峰山、御岳界仙峡、大鳥山、徳和で著しい。

第4に御坂山脈が富士五湖をとり囲んでいる、御坂山脈は河口湖の北方、笹子峠から南西にのびて本栖湖の西側釈迦ヶ岳までをいう。南方に天子山脈が続く。天子山脈は竜ヶ岳から天子岳に至る、さらに東方の山中湖北方には道志山脈があって丹沢山塊に連なっている。

第5に八ヶ岳、富士山の広大な裾野が開けている、本県北西から南東にかけて、富士火

山帯が走っている。第四紀火山の富士山、八ヶ岳の名山がそびえている。これは広い据野をもち、産業経済の舞台として重要な役割を果たしている。茅ヶ岳も広大な据野を有する。

第6に富士川水系、相模川水系、丹波川水系がある。富士川水系は甲府盆地を南下して富士川谷から静岡に至る、南アルプス東麓、御坂山系西麓、八ヶ岳、奥秩父の水を集めたものをいう。また相模川水系は御坂山系西麓、関東山地南部の水を集めたものである。丹波川水系は関東山地の中央部をほぼ東西に走る水系で、奥多摩湖から多摩川水系に至る。

(3) 地 質

山梨県は日本列島の中央に位置し、地質的には、これをほぼ直角に横断する糸魚川－静岡構造線が通っている重要な地域である。

これを境に東北日本と西南日本とに区分される。

東北日本はグリーンタフ（緑色凝灰岩）が広く分布し、本県ではフォッサ・マグナ（大地溝帯）地域となっている。東側の境を広義では利根川構造線となるが、本県では従来狭義に、岩村田－若神子線、藤野木－愛川線をグリーンタフ地域と四万十帯との区画としている。

西南日本は、諏訪湖から天竜川に沿って、紀伊半島、四国北部、九州に至る中央構造線によって西南日本内帯（日本海側）、西南日本外帯（太平洋側）に区分されている。

本県は本州区と四万十区、フォッサ・マグナ地域に属している。

本州区と四万十区は本県の北部で、東側の関東山地と、西側の赤石山地にほぼ直角に折れていて、全体としては帯状構造をしている。

このうち本州区は四万十層群形成前の時代（1.8億年より以前）をいい、本県では関東山地と赤石山地の一部にわずかに分布している。これは古生代後半の本州地向斜（秩父地向斜）による堆積物が、古生代末期から中生代初期にかけての本州造山運動によって隆起したものである。

四万十層群は、四万十層群形成時代（1.8億－3,000万年前）で、中生代から古第3紀におよんでいる。本州区との境界は仏像構造線で、本県では白根層群、小仏層群、三倉層群、瀬戸川層群などで赤石山地および関東山地に広く分布している。

グリーンタフ変動は、御坂層群形成の時代（3,000万年－1,300万年前）で甲府盆地をとりまく巨摩山地や御坂山地がこれにあたり、御坂層群としている。

富士川層群形成の時代（1,300万年－600万年前）この時代の地層は富士川流域、桂川流域に分布している。

グリーンタフ変動で最も著しいことがらは、フォッサ・マグナ地域が沈降して、東北日本と西南日本が切り離されたことである。

甲府北部の火山活動（600万年－200万年前）このころ甲府北部の水ヶ森火山の爆発が起った。

第四紀（200 万年 — 現在）は世界的に氷河時代で、山梨県にも証拠が残っている。

北岳、間の岳、仙丈岳の頂部には、顕著なカルデラ地形が認められる。

氷期における海水面の下降に伴い、海峡が干上って日本列島は広がり、大陸に接続して象かオオツノジカが移動してきた。山梨県にも山梨市兄川河床より大陸に故郷を持つナウマン象の化石が発見されている。この時代には海岸では海岸段丘が、また特に本県のような河谷の多いところでは河岸段丘が形成された。

第四期の日本列島には、各地に激しい火山活動が起こり、広い地域に火山灰層を堆積した。甲府北部の茅ヶ岳や八ヶ岳、富士山もこの時代の火山である。甲府盆地の南部にある曾根丘陵や西部の市之瀬台地に載っている厚さ数 m のローム層はこの時代の火山灰で、そのうち浮石層は木曾の御岳の火山噴出物である。

(4) 植 生 概 説

山梨県は総面積 $4,464 \text{ km}^2$ にすぎない小さい県であるが、周囲に富士山（3,776 m）をはじめこれに次ぐ日本第 2 の高峰南アルプス白根の北岳（3,192 m）または千丈岳（3,033 m）甲斐駒ヶ岳（2,966 m）鳳凰山（2,841 m）八ヶ岳（2,899 m）金峰山（2,595 m）など高海拔の山岳をひかえ、またこれを取り巻く山脈が連なっており、県南部の富士川の最低点 80 m から最高点の 3,776 m までの差の大きいことは全国でもまれである。そのため暖帯から温帯、亜寒帯、寒帯と植生の分布全体にわたって見られるところが多い。

I 暖帯常緑広葉樹林

県南部の富士川沿岸から甲府盆地にかけて川に沿ってさらに北上し、平地から低山地にかけ海拔 500 m ぐらいまでの地域が暖帯に属し、身延以南ではタブノキ、シロダモ、シラカシ、ウラジログシ、ヤブツバキを主とする常緑広葉樹林で占められている。

甲府盆地は暖帯の北部に当たるので耐寒性の強いアラカシ、シラカシ、ヤブツバキなどが生育している。県東部に当たる桂川流域も暖帯に属し、シラカシ、アラカシ、ウラジログシなどの生育が見られる。

これを日本全体から見ると関東以南の平地や丘陵地、低山地が常緑広葉樹で占める地域であり、これらの代表植物はカシ類であることからこの地帯をカシ帯とも呼んでいる。

この地帯は長い間に人間社会の激しい影響を受け、この地域の自然植生は大きく変形されて、限られた一部を除いては自然植生は見られなくなっている。

富士川流域では下部温泉付近から身延山以南にはカシ林が比較的多く残され、井出の八幡神社、下野の八幡神社にはタブノキを主とした社叢が残されている。甲府盆地周辺にもカシ林が残され、特に神社、寺院の境内にはシラカシ、またはアラカシの林が残されている。これらは自然植生の残存として貴重なものである。桂川流域でもシラカシ、アラカシ、ウラジログシの林が所々に見られる。

Ⅱ 温帯落葉広葉樹林

カシ帯の上から海拔 1,800 m ぐらいまでの間はミズナラ、ブナの生育する地域である。この地域は森林植物帯からは温帯に属し、ブナはこの代表樹種であり、ブナ帯と呼んでいる。

この地帯が暖帯、温帯、亜寒帯、寒帯の 4 つの植物帯のうちでは最も広い地域を占めている。これを日本全体からみると、本州中部山地および東北地方から北海道の南部にかけての地域と、それに本州の紀伊半島以西、四国、九州の一部の山地が入る地帯であり、イヌブナ、ブナ、ミズナラ、カエデなどが生育している。

ブナ林も人為的な影響を受けて、自然植生はごく少ししか見られなくなっている。元来はカシ林とブナ林は続いていたものであったが、破壊されてカシは下方に、ブナは上方に退き、その間に二次林としてコナラを主とした、他にカエデ、サクラ類などを交えた林が形成されている。またこれらも充分育たないやせ地にはアカマツが生え、アカマツ林となって行くが、本県ではアカマツと落葉広葉樹との混交林が多く広がっている。身延山ではこのカシ帯からブナ帯に移行する自然植生が残されている。身延願満堂から追分への道の下部はシラカシ、アラカシ、ウラジログシの林で上部はイヌブナ、ブナの林である。願満堂の上海拔 600 m 付近でカシとブナが接し、しばらくの間両者は混生し、その上部ではイヌブナ、ブナの林となっている。また富沢町奥山の田代峠への入口から少し上方の道下の崖にはブナとウラジログシの混生が見られ、ブナは相当な大木に育っている。海拔 600 m で、ここは東海自然歩道になっている。

これらの林は自然植生を知る上で残されたものとして貴重である。

本県では一般的に南部にブナ林が多いが、北部にもないわけではない、しかし北部地方のブナ林は地形が有利なため早くより伐採され、人工林に置き換えられてしまったためと考えられる。ブナ林の林床植物としてはミヤコザサ、スズタクなどササ類が多いことが特徴である。

Ⅲ 亜寒帯針葉樹林

富士山、南アルプス、八ヶ岳、関東山地の海拔 1,800 ~ 2,500 m の間は亜寒帯に属し、シラベ、コメツガ、オオシラビソ、トウヒなどの針葉樹林からなり、その中にダケカンバを混生している。富士山ではこの帯の上部にカラマツ林が発達している。金峰山ではクロベ、チョウセンゴヨウなどが混生する。

本県の亜寒帯針葉樹林も一部ではかなり広範にわたって伐採され人工林となっているところもあるが、大部分は自然のまま残されており各所でりっぱな林を見ることができる。

これらはシラベ—コメツガ林であったり、シラベ—オオシラビソ林であったり、また単独の林であったり、その地形や土壌条件で多少の変化がある。林床植物は極生相を呈している場合はコケ類の発達が著しく、他にはマイヅルソウ、ゴゼンタチバナ、セリバシ

オガマ等の草本がわずかに生える程度である。

しかしこの林が疎林になったり、枯れたりするとそこにはダケカンバ、ネコシデ、オガラバナ等の落葉広葉樹が進入したり、これらが進入しないまでも、多少日光が入るところではコヨウラクツツジ、ウラジロヨウラク、等の低木がコケ類に交ざって林床に生育する。特に本県亜寒帯の林床にはセリバシオガマ、オサバグサ等特徴的なものが多い。

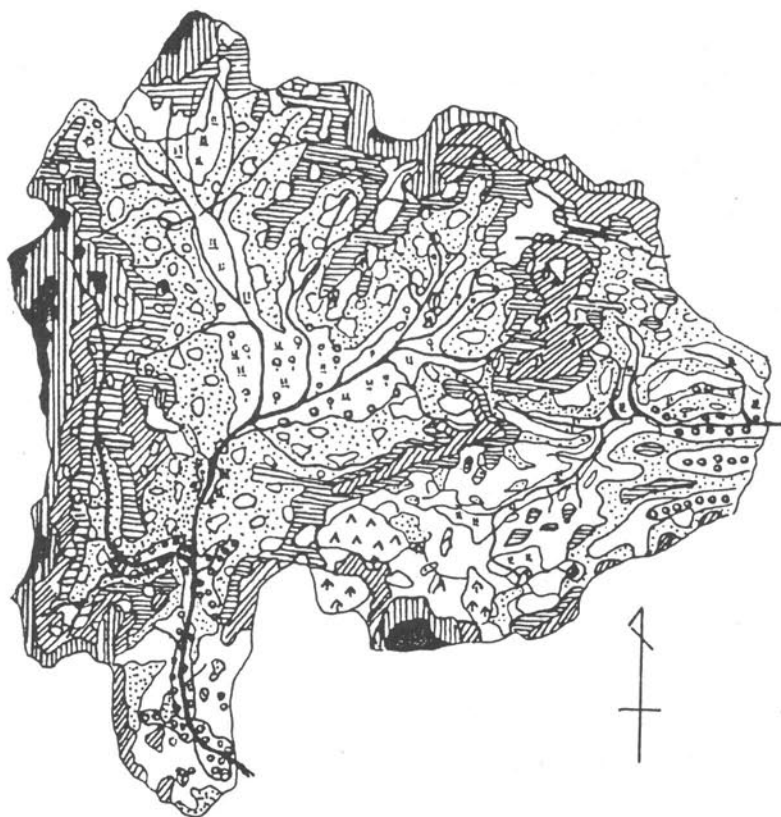
Ⅳ ハイマツ群落、高山草原

八ヶ岳、南アルプス、金峰山等の 2,500 m 以上の地帯にはハイマツが生育し、高山草原にはお花畑を形成する。中でも自根北岳の高山植物は種類も多く、キタダケソウ、キタダケトリカブト、キタダケヨモギ、他貴重な植物が多い。富士山にはハイマツがなく高山植物も数が少ないが、これは富士山が新しく孤立した山であるからであろうと考えられる。

高山帯の自然植生は大方保たれているが、近年登山者の激増により破壊される心配がある。

以上山梨の植生の概要であるが、これを略図化したものが次の図である。

山梨県の植物分布図



凡

例

	カシ類を含む林		ハイマツ・高山植物・火山荒原 天然カラマツ・ダケカンバ
	ヒノキ・ツガ・アカマツ林		ササ原・草原
	クヌギ・コナラ・クリを主とする林		スギ・ヒノキ・アカマツ植林
	カエデ・シデを主とする林		カラマツ植林
	ブナ・ミズナラを主とする林		水田・畑・市街地等
	ダケカンバ亜高山針葉樹林		

4. 凡 例 解 説

寒帯、高山帯自然植生

1. コケモモ・ハイマツ群集

（相観） 高山針葉樹低木林

本群集は海拔 2,500 m 以上の高山帯をしめていて優占種としてハイマツ、コケモモ、ミヤマハンノキ、ハクサンシャクナゲ、ガンコウラン、ウラシマツツジ、カラマツ、トウヤクリンドウなどが目立つ。

草本層では前記のほかミヤマノガリヤス、コメススキ、ウシノケグサ、ミヤマアキノキリンソウ、キンブヒゴタイ（金峰山）、タカネヒゴタイ、タカネニガナ、ミネズオウ、コメバツガザクラ、ミヤマズメノヒエ、マイヅルソウなどが見受けられる。

高山頂をこの群集はしめることが多いため風衝地に発達する低木性のハイマツ、ミヤマハンノキ、キバナシャクナゲ、チョウジコメツツジ（南アルプス）、ハコネコメツツジ（秩父金峰山）などがあり、それらの下草として小型のイワインチン、ガンコウラン、コケモモなどが優占する。山梨県関係の場合には内陸性の乾燥型のお花畑が発達していることが多い。

2. コメバツガザクラ・ミネズオウ群集

（相観） 高山風衝矮生低木群落

この群集は南アルプス、秩父金峰山等の固岩屑に発達する群落である。

この群集はガンコウラン、コケモモ、ミネズオウ、コメバツガザクラ、トウヤクリンドウ、ヒメノガリヤス、ウシノケグサ、ミヤマアキノキリンソウ、キンブヒゴタイ、タカネニガナ、ミヤマズメノヒエ、マイヅルソウなどがなる群集である。

生態的には固岩屑とともに高山風衝地に発達するものである。

3. オヤマノエンドウ・ヒゲハリスゲ群集

（相観） 高山風衝草本植物群落

高山帯の尾根筋に発達する群集である。南アルプス北岳、仙丈ヶ岳、鳳凰山、八ヶ岳等の固岩屑の斜面にも発達する。一般に乾燥性で、その海拔は 2,800 ~ 3,000 m の高海拔地に多いものである。

この群集ではウシノケグサ、タカネヒゴタイ、トウヤクリンドウ、ホウオウシャジン、キバナノコマノツメ、ミヤマウイキョウ、タカネビランジ、コケモモ、ガンコウラン、ヒゲハリスゲ、ミヤマミナグサ、イワスゲ、イワツメクサなども目立ち、徐々に崩壊砂礫地植生へと移行していくことが多い。

4. コマクサーイワツメクサクラス

（相観） 高山荒原植物群落

山梨県では南アルプス、八ヶ岳連峰、秩父山塊等の海拔 2,500 m 以上の高山帯に発達するもので、このような場所では寒冷な気候条件のため高木層を形成することは少ない。このような高山帯ではハイマツを中心にしてチシマギキョウ、タカネツメクサ、イワツメクサ、ミヤマミミナグサ、コマクサ、ウラシマツツジ、キバナノコマノツメ、クロマメノキ、キンロバイなどが目立つ。しかし富士山にはハイマツが見られない。赤岳頂上付近から権現岳にかけてはコマクサが見受けられるが、その分布密度は長野県側の硫黄岳、赤岳、横岳ほどには多くない。

東京大学理学部や、国立東京科学博物館の腊葉庫内には南アルプス甲斐駒ヶ岳産のコマクサの標本が見受けられる。しかしながら現在では 10 数回にわたる調査を筆者はしているが、甲斐駒ヶ岳ではまだこのコマクサに遭遇していない。

人為的に採取され、なくなったものか、それとも自然に消滅したものか明確にこの点について指摘することができない。

5. フジハタザオーオンタデ群集

（相観） 高山火山荒原植物群落

富士山の五合目以上を中心にして発達している群落にフジハタザオーオンタデ群集が見られる。

急斜面でしかも溶岩性のスコリアからなりたつ立地に発達する植物社会である。このような場所では裸地が目立ち、雨水は地中に直ちに浸透するか溶岩上を流下することが多い。また夏の直射日光のため、スコリアもしくは岩盤は高温の状態となり、このような場所に生育する植物には耐寒耐熱性の植物が多い。

このようなスコリアもしくは溶岩上ではオンタデ、フジハタザオ、メイゲツソウ、ミヤマオトコヨモギ、ヤハズヒゴタイ、フジアカシウマ、コケモモ、ミヤマヤナギなどが目立つ。五合目以上の海拔（2,500 m）とまではいかなくとも三、四合目付近のスコリアもしくは人工的な石垣地域でもフジハタザオ、メイゲツソウ、ムラサキモメンズルなどが見られる。

6. タカネヤハズハハコーアノツガザクラ群集

（相観） 高山雪田植物群落

南アルプス北部、間の岳、北岳、仙丈ヶ岳、農鳥岳等の高山帯乾燥性岩屑地にこの群落は発達する。

山梨県内の山岳は一般に積雪が少ないためこの群集は部分にしか発達していない。雪の多いところにはアノツガザクラ、チングルマ、レンゲイワヤナギなどの小型の木本植物

があり、このほか、ムカゴトラノオ、ハクサンイチゲ、キタダケソウ、タカネヤハズハハコ、などの草本植物などの混生群落形成されている。

このような群落の分布するのは本州中部から東北地方の山岳地帯にかけて広く分布するものである。レンジイワナギ群集は赤石山脈系特有の群集である。八ヶ岳や富士山には群落単位の定った雪田社会が見られない。残雪が少なく、乾燥が著しくなるとガンコウラン、ミネズオウ、コケモモなどの木本植物が多くなり、やがて風衝地性矮生低木群落へと移行していく。

7. シラビソ-オオシラビソ群集

（相観） 亜高山性針葉樹高木林

シラビソ-オオシラビソ群集はこの両種に混じえてコメツガ、トウヒ、ネコシデ、ダケカンバ、ナナカマド、オガラバナなどを混じえている。2～4 mの低木層ではシラビソ、オオシラビソ、トウヒのほかにコヨウラクツツジ、ナナカマド、ミネカエデ、ハクサンシャクナゲなどが高い常在度を示している。草本層の被度は5～98%と林分による差が著しい。その場所ではシノブカグマ、セリバオウレン、オサバグサ、コミヤマカタバミ、ゴゼンタチバナ、コガネイチゴ、ヒメタケシマラン、タケシマラン、ヒメウスノキ、マイヅルソウ、ミヤマワラビ、コガネギク、ウスノキ、ツルツゲ、イワセントウソウ、コフタバラン、オオバスノキ、ミツバオウレン、バイカオウレン、キソチドリ、イワカガミ、キバナノコマノツメ、ヒカゲノカズラ、セリバシオガマ、ヒメノガリヤスなどが目立っている。

8. カラマツ群落

（相観） 亜高山性落葉針葉樹林

富士山の鳴沢村分や八ヶ岳権現岳、金峰山の水晶峠側などには自然生のカラマツ群落が見られる。

この群落では高木層をカラマツ、シラベ、オオシラビソ、ダケカンバ、ヒメコマツなどが有占している。亜高木層ではカラマツ、シラベ、サビバナナカマド、タカネイバラ、ウラジロハナヒリノキ、草本層ではシラベ、カラマツ、タカネイバラ、ツバメオモト、ハコネコメツツジ、ミヤマアキノキリンソウ、ショウジョウスゲ、ヒナスゲ、マイヅルソウ、コイチャクソウ、ハクサンシャクナゲ、イワノガリヤス、ウシノケグサなどが見られる。

富士山のものは一般に五合目付近に見られるが、風衝地のため背の低いものが多い。八ヶ岳権現岳付近のものは高木のものが目立ちサルオガセの着生しているものも目立っている。

9. ミドリユキザサーダケカンバ群団

（相観） 亜高山性風衝地植物群落

富士山五合目付近の風衝地で、日当りのよい場所にダケカンバ林が発達している。この樹形は雪やスコリアの影響を受けてか斜上した枝ぶりのダケカンバが目立っている。

この群団を構成している高木層としてはダケカンバ、カラマツ、シラビソ、オオシラビソ、などからなりたっている。亜高木層ではダケカンバ、シラベ、オオシラビソ、カラマツなどが眼にとまる。中低木ではミヤマヤナギ、ダケカンバ、シラビソ、オオシラビソ、ミヤマハンノキ、オニク、サビバナナカマド、タカネザクラ、ウラゲハクサンシャクナゲ、タカネバラなどが眼につく。

草本属ではマイヅルソウ、コケモモ、タカネザクラ、タケシマラン、ツバメオモト、メイゲツソウ、ミヤマアキノキリンソウ、ホタルブクロ、フジオトギリ、フジハタザオ、ミヤマハンショウズル、ミヤマフタバランなどが見うけられる。

10. シナノキンバイーミヤマキンボウゲ群団

（相観） 亜高山性草本植物群落

南アルプス北岳山麓の白根御池付近にはシナノキンバイーミヤマキンボウゲ群団が見うけられる。

海拔は約 2,800 m ほどで土壌はやや湿性地を好むキンボウゲ科の草本が見うけられる。

この群団での高木としてはダケカンバ、ハイマツ（富士山にない。）、ミネザクラ、サビバナナカマド、タカネバナナカマド、ウラジロバナナカマドなどが見られ、これらの樹木間の間隔はやや広くかけ離れている。ここでの草本としてはミヤマキンボウゲ、シナノキンバイ、モミジカラマツ、オオヒョウタンボク、ヤブガラシ、イワカガミ、シロバナノヘビイチゴ、ミヤマキンボウゲ、センジュガンビ、サンリンソウ、センジョウアザミ、ミヤマコウゾリナ、ミツバペンケイソウ、シシウド、アマニュウ、ヤハズヒゴタイ、ムカゴトラノオ、クガイソウ、シラネワラビ、サンカヨウ、グンナイフウロ、クルマユリ、オニシモツケなどが見られる。

11. 伐 跡 群 落

（相観） 亜高山性伐跡地群落

策ヶ岳、八ヶ岳、南アルプス、秩父等の亜高山帯にはシラベ、オオシラビソ等の伐跡群落が形成されている。このような群落は山梨県内には各地に見られるが、ここでは海拔 2,100 m の奈良田湖奥のものを代表にしてふれてみる。高木層は伐採されてしまって見うけられないわけであるが、その低木層ではシナノキイチゴ、ウスノキ、ダケカンバ、サビバナナカマド、ニガイチゴ、ススキなどが見うけられる。

草本層ではマイヅルソウ、シノブカグマ、シラネワラビ、ヤマハハコ、ヒメジョオン、ツ

クバネウツギ、ヤクシソウ、ハコネウツギ、アメリカセンダングサ、ヒメノガリヤス、ヒロハツリバナ、ユモトマユミ、イヌブナ、ニシキウツギ、シラベ、ミツバオウレン、ヒメムカシヨモギ

12. ダケカンバ群落

（相観） 亜高山性落葉広葉樹林

乾燥性の非固岩屑や褐色森林土壌上の斜面にダケカンバ群落が発達することがある。ダケカンバの樹高は約15mでその植被率は約85%である。

この群落では下草が割合に豊富に見られる。その例をあげてみるとヒメノガリヤス、ミヤマアキノキリンソウ、マイヅルソウ、ゴヨウイチゴ、ヤハズヒゴタイ、オヤマノリンドウ、ミヤマワラビ、タケシマラン、セリバシオガマ、コミネカエデ、キバナノコマノツメ、クロウスゴなどがそれである。

低木ではウラゲハクサンシャクナゲ、カクミノスノキ、クルマユリ、などがあり、さらに南アルプス北部などではムカゴトラノオ、ミヤマワラビ、ミヤマアキカラマツ、タイツリオウギ、ミヤマアキノキリンソウ、イタドリ、コメススキ、タカネグンナイフウロ、キバナノコマノツメ、ヒメコゴメグサ、バイケイソウ、ヨツバシオガマ、ミヤマトリカブト、ミヤマハンシウヅルなどの草本も目立つ。

ブナクラス域自然植生

13. ヤマボウシ・ブナ群集

（相観） 夏緑広葉樹の高木林

ヤマボウシ・ブナ群集は、本県では海拔1,200～1,700 mに分布するブナ林で、高木1層は樹高12～20 m、被度・群度2・2～4・3のブナ優占し、ヤマボウシ、イヌシデ、ウラジロモミ、オオイタヤメイゲツ、イタヤカエデなどが混生する。高木2層はブナ、イタヤカエデ、イヌシデ、ヒメシャラ（七面山）など8～10 mのものが生育する。林床は1～2 mのスズタケが被度・群度とも4・4以上カーペット状に履って、他の植物が貧相にあるのがこの群落の特徴である。山梨県内の主な分布は、県南部の七面山、笹ヶ岳山麓。県東部の七ツ石山。黒岳の一部など。

14. イヌブナ群集

（相観） 夏緑広葉樹の高木林

イヌブナ群集はブナクラス域下部に自然植生として生育する。

高木1層は高さ15～30 m、植被率70～90%でイヌブナが優占し、その中に植被率の高い割合でツガ、あるいはミズナラが混じる。その他、リョウブ、イタヤカエデ、クマシデなども生育する。高木2層はイヌブナ、リョウブ、オオカメノキ、イロハモミジ、シデ属などで構成する。低木層は各地の環境条件により、植被率、出現種数は一定していない。主なものには、アセビ、リョウブ、タマアジサイ、イヌブナ、クロモジ、クサアジサイ、コバノガマズミ等がある。

山梨県下では海拔700～1,500 mのブナクラス域下部に分布する。主なものとしては大菩薩嶺一帯、県南部の七面山、布引山、丹沢山地、富士山麓の大室山など。

15. オオモミジガサ・ブナ群集

（相観） 夏緑広葉樹の高木林

オオモミジガサ・ブナ群集は、15～25 mのブナが高木1層を優占し、その中にウラジロモミ、ミズナラ、イタヤカエデなどが混生し、植被率は70～90%をしめる。高木2層および低木層は植被率は低く10～30%で、ブナ、ウラジロモミ、オオカメノキ、イタヤカエデ、オオイタヤメイゲツ、ミヤマアオダモ、ウリハダカエデ、ヒロハツリバナ、トウゴクミツバツツジなどで構成する。次にヤマボウシ・ブナ群集と大きく異なるところは草本層で、スズタケがほとんどなく、ヤマタイミンガサ、コウモリソウ、オオモミジガサ、ヤマトリカブト、などが高い群度で出現する。その他レンゲシウマ、ヤハズヒゴタイ、ユキ

ザサ、ヤマドリゼンマイ、テンニンソウ、マルバダケブキなども混生し、出現種数も大きくなる。県内の分布は限られた場所で、海拔 1,400~1,800m のところで、御坂山地の黒岳付近、三ツ峠、丹沢山地の加入道山から大室山。御正体山など。

16. ツガーコカンスゲ群集

（相観）常緑針葉樹の高木林

ツガーコカンスゲ群集は樹高 10~20m、植被率 70~80% の高木 1 層にツガが優占する。その中に、イヌブナ、イタヤカエデ、サワシバ、クマシデなどが混成する。高木 2 層は植被率が低く 20~30% で、ツガ、イタヤカエデ、アカシデ、ミズナラ、イヌブナなどで構成する。低木層はツガが主で、その他ミツバツツジ、コヨウラクツツジ、ネジキ、ヤマツツジ、ハウチワカエデ、ミズナラ、リョウブなどがある。草本層は 0.3~0.5m 位で、場所により植被率が違う。構成する主な種は、コカンスゲ、オシダ、ミヤマイタチシダ、スズタケ等である。

県内での分布は海拔 1,400 m 以下のブナクラス域の表層土のうすい、ところどころ岩礫や基盤が露出しているところに線状あるいは小塊状に分布する。主な群落は白州町尾白川上流、大菩薩嶺北東斜面、早川支流沿いがある。

17. ハリモミ群落

（相観）常緑針葉樹の高木林

山中湖村沖新畑、標高 960 m 鷹丸尾溶岩流上に発達した原生林。樹令約 250 年前後のものが山梨県内ではこの一ヶ所に広く分布する。

高木 1 層は高さ 20~25 m のハリモミが優占。高木 2 層はほとんどの所で欠く。場所によってはハルニレ、ハリモミが生育している。低木層・草本層は、一つひとつの被度は小さいが樹種は比較的多い。リョウブ、ウリカエデ、ヤマウルシ、ミヤマイボタ、マメザクラ、ソヨゴ、ハナイカダ、オトコヨウゾメ、スノキ、ムラサキシキブ、ノリウツギ、コマユミ、サラサドウダン、アカマツ、ツノハシバミ、サワダツ、ニワトコ、サルナシ、フジサンシキウツギ、シロバナヘビイチゴ等。1963(昭和 38 年) 1 月 18 日、国の天然記念物の指定を受けているが、最近急速に立枯れが目立つ。所々、植林も行っている。

17. ウラジロモミ・コメツガ群集

（相観）常緑針葉樹の高木林

ウラジロモミ・コメツガ群集は、ウラジロモミ、コメツガなど、樹高 10~15 m の常緑針葉樹が高木 1 層に優占し、その中にダケカンバやシデ属の樹木が単木的に混生する。高木 2 層の植被率は高木 1 層の植被率によって大きく異なり、1 層の植林率が高いと 2 層は著しく低い傾向にある。樹種はウラジロモミ、コメツガが主である。低木層および草本層は、

イタヤカエデ、クマシデ、ミヤマイボタノキ、アオダモ、ハウチワカエデ、オシダ等である。山梨県内の分布は海拔 1,400 m 付近を下限に、一部はコケモモートウヒクラス域に及ぶ範囲。基盤はところどころ露出し、土壤の堆積はうすい。第アルプス鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳、早川沿いの急傾面。金峰・瑞牆山。大菩薩嶺から小金沢山。富士山麓一帯に分布する。

18. ヒノキーシノブカグマ群集

（相観）常緑針葉樹の高木林

ヒノキーシノブカグマ群集は高木 1 層の樹高 14~20m のツガ、ヒノキが優占し、ヒメコマツ、ハリモミ、ヨグソミネバリ、ミズナラ、コハウチワカエデなども混生する。植被率は 70~80% である。高木 2 層は植被率も低く樹種も貧弱である。樹種はツガ、ヒノキ、ヨグソミネバリ等である。低木層（2~6 m）も植被率は低く、10~20% 前後で、アセビ、クロソヨゴ、タカノツメ、ソヨゴが主で、その他にミツバツツジ、イタヤカエデ、コミネカエデ、スノキ、ホツツジなどが生育している。草本層はシノブカグマ、ツマトリソウ、ゴカヨウオウレン、イチョウラン、ツルアリドウシ、ホソバトウゲシバ、ミヤマイタチシダ、ヘビノネゴザなどがある。

山梨県内での分布は富士山北西の裾野の青木ヶ原溶岩流（青木ヶ原樹海とも呼ばれる）海拔 900~1,300 m 付近に広く分布する。

19. アカマツ群落

（相観）常緑針葉樹の高木林

アカマツ林は自然植生から二次林、さらに植林されたもので、群落構造上も漸新的変化であり明確な境界がひきにくい。またここで述べるアカマツ群落はブナクラス域として扱い、ヤマツツジーアカマツ群集はヤブツバキクラス域とした。

アカマツ群落は、土壤堆積物がうすく、岩盤が露出しているところに生育している。県下では富士山麓の剣丸尾、青木ヶ原樹海の御殿庭一帯など広大な群落がある。

この群落の高木 1 層は、樹高 10~18m のアカマツが 60% 近くの植被率で生育している。高木 2 層は 7~10 m のソヨゴ、ウリカエデなどである。低木層はソヨゴ、ノリウツギ、ヤマウルシ、マメザクラ等。草本層はソヨゴ、ミヤマイボタ、ウツギ、ナツハゼ、ミツバアケビ、ダンコウバイ、ネズミサシ、コナラ、ヤマハギ、ツノハシバミ等である。

20. ミヤマクマワラビーシオジ群集

（相観）夏緑広葉樹の高木林

ミヤマクマワラビーシオジ群集は高木 1 層はシオジが優占し、樹高 8~25 m、植被率 80~90%。イヌブナ、サワグルミ、シナノキ等が混生する。高木 2 層にはシオジ、サワグルミなどが優占し、その他サワシバ、チドリノキ、オガラバナ等も混じる。低木層には、

シオジの若木が多数生育している。草本層はミヤマクマワラビ（群落標徴種）、イヌワラビ、ヘビノネゴザ、場所によりスズタケなども生育する。この群落はブナクラス域の河川流域の溪谷礫岩地に発達する。県内の主な分布は、笛吹川上流や葛野川上流。早川町雨畑川支流など。

21. タマアジサイーフサザクラ群集

（相観）夏緑広葉樹の高木林

タマアジサイーフサザクラ群集は、ブナクラス域下部の溪谷沿いなどの崩壊性の高い立地に生育する。高木1層は8～12m、植被率70%前後、フサザクラを優占種として、シデ属、ミズキなどが混生する。高木2層は樹高6～8m、樹種は高木1層とほぼ同じ。低木層草本層はタマアジサイ、フキ、モミジハグマ、ウワバミソウなどの被度・群度が高い。その他ムラサキキブ、アブラチャン、アオハダなども生育する。県内では海拔が500～1,100m前後の沢添いに細長く分布域をつくる。主な分布域は芦川溪谷沿い、大菩薩東部の小金沢、道志川一帯であるが、ケヤキ群落とほぼ同一地に見られるので、植生図には、この群落がのせてない部分もある。

22. ドロノキーオオバヤナギ群集

（相観）夏緑広葉樹の高木林

ドロノキーオオバヤナギ群集は海拔1,300m以上に生育する河辺林で、ブナクラス域からコケモモートウヒクラス域を中心に生育する。

高木1層は、樹高12～18mのオオバヤナギが優占し、その中に被度・群度1・1くらいの割合でドロノキが混生する。高木2層はオオバヤナギ、オノエヤナギ、ドロノキ、カツラなどが生育する。低木層はコメツガ、マユミ、ミヤマイボタが低い植被率でみられる。草本層はススキ、ヨモギ、フジアザミ、カワラハハコなどが生育する。

山梨県内では深いV字谷を作っている南アルプスの広河原付近から北沢峠。また両俣小屋付近が主である。両俣付近のドロノキーオオバヤナギ群集は台風によって土砂が堆積し、相当数立枯れが目立つ。

23. フジアカショウマーシモツケソウ群集

（相観）山地風衝草原

風衝草原は、海拔1,500m以上のブナクラス域からコケモモートウヒクラス域下部の風がふきこす山頂部とか、風あたりの強い山腹などに発達する所が多い。これらの草原では、表士の浅い岩石地にはツツジ科の低木が優占する。— 県内では破不山。また、土壤の厚い所ではササ類とイネ科の草本を主体とした草原となっている所が多い。— 県内では雁坂峠。風衝草原はタチコゴメグサーミヤコザサ、スズラン—シモツケソウ群落、フジアカ

ショウマーシモツケソウ群集などに分類できるが、今回の植生図は風衝草原として、24
フジアショウマーシモツケソウ群集に一括した。

植生調査表のタチコゴメグサーミヤコザサ群落（雁坂峠）の植生を説明すると次のよう
になる。

0.2～0.5 m位のミヤコザサが被度・群度4・4で優占し、その中にショウジョウスゲ、
イワノガリヤス、アカギキンボウゲ、シモツケソウなどが占めている。その他、イワイ
ン、ミヤマコンギク、ヤマハハコ、クガイソウ、マルバダケブキ等が生育する。

山梨県内のフジアカシショウマーシモツケソウ群集の主な分布は、破不山から雁坂峠にか
けて。大菩薩嶺から小金沢山。御坂山塊、三ッ峠など。

24. フジアザミーヤマホタルブクロ群集

（相観）崩壊地草本植物群落

この群落はブナクラス域のフォッサ・マグナ地域（前川1949）の崩壊地に生育する草
本群落。県内では、富士山を始めとして、八ッ岳山麓、三ッ峠地域、金峰山一帯、早川流
域のがれ地に分布する。生育地は点在しているので、植生図には記載できない部分が多く
ある。

フジアザミーヤマホタルブクロ群集は、ロゼット状に葉を広げたフジアザミが砂礫地
中で優占する。これらの条件下の中なので、草本の出現種数は少ないが、その他、クサボ
タン、イブキジャコウソウ、ヤマホタルブクロ、イタドリ等混生することが多い。

25. オオヨモギーオオイタドリ群団

（相観）林縁草本植物群落

オオヨモギーオオイタドリ群団は、ソデ群落と呼ばれ、隣接する森林植生や立地条件の
差異に応じて、優占種、種組成などに変化が著しい。この群団の中のアカソーイタドリ群
落はスギの植林地に多く、イタドリ、アカソ、イタチササグなどが優占する。

クサコアカソ群落は、アブラチャンーケヤキ群集に接した湿潤地に生育し、クサコアカ
ソ、フキが優占し、その他リュウノウギク、ヨモギ、キハギなど高い植被率で生育してい
る。オオヨモギーオオイタドリ群団は、山梨県内のヤブツバキクラス域上部からブナクラ
ス域にかけて数々見られるが、植生図に記載できる広さは少ない。

26. ケヤキ群落

（相観）夏緑広葉樹の高木林

ブナクラス域のケヤキ群落は、海拔1,000 m付近を上限に、溪谷沿いに生育する。

樹高18～25 mにたつする高木1層はケヤキが高い植被率で優占する。その中にクマ
ノミズキ、イヌシデ、アブラチャン、エンコウカエデ等が混生する。高木2層は、コナラ、

イロハモミジなどのカエデ属、アズキナシ、サワシバ、アサダ、イヌガヤなどで構成している。低木層・草本層はヤマブキ、クマノミズキ、ダンコウバイ、アブラチャン、ガマズミ、イロハモミジ、ハナイカダ、バイカウツギ、ヤマコウバシ、イタヤカエデ、フジ、フキ等種数は多いが、植被率は低い。

県内での分布は、芦川溪谷沿い。大月市葛野川支流。塩川支流など。

ブナクラス域代償植生

27. クリーミズナラ群落

(相観) 夏緑広葉樹の高木林

本群落はブナクラス域に、ヤマボウシ・ブナ群落、イヌブナ群集などの自然林が伐採されたあとの夏緑広葉樹の二次林である。

高木1層は樹高12~25 mのミズナラが植被率80%近く占める。その中にクリ、ハウチワカエデ、コハウチワカエデ、ヤマハンノキ、ウラジロモミ、ハリギリ等が混生する。

高木2層は7~12 mで植被率は一般に低く20~30%、場所によってことなるが、イヌブナ、コミネカエデ、オオカメノキ、クマシデ、ウリハダカエデ等が生育している。低木層・草本層にはノリウツギ、ミズナラ、コバノトネリコ、トウゴクミツバツツジ、スズタケ、チョウジザクラ、モミジハグマ、ミヤコザサ、アキノキリンソウ、ツタウルシ、ヘビノネゴザなどが生育する。県内での分布は、ブナクラス域の広い範囲で分布する。

28. レンゲツツジーシラカンバ群集

(相観) 夏緑広葉樹林

レンゲツツジーシラカンバ群集は、高さ8~17 mのシラカンバが高木層を優占し、八ッ岳や瑞牆山腹ではヤエガワカンバ、アカマツ、カラマツ、ミズナラ、ヤハズハンノキ、ミヤマザクラ、海拔1,700~1,800 mくらいになるとダケカンバ等が単木的に混生する。高木層の植被率は70~80%くらい。低木層はミズナラ、レンゲツツジ、シラカンバ、ミヤマイボタ、サラサドウダン、トウゴクミツバ、ヤマウルシ、マユミなどが生育する。草本層はススキ、レンゲツツジ、ミヤコザサ、アキノキリンソウ、タムラソウ、ヘビノネゴザ、ヤマドリゼンマイ、ヤハズハンノキ、カラマツソウ、リンドウ、イタドリ等が生育することが多い。

この群集はブナクラス域の年較差が大きく、降水量が比較的少ない地域によく発達し、本県では海拔1,300 m前後から1,700 m位のところに見られる。代表的なところは、八ッ岳山麓、瑞牆山麓など。

29. ニシキウツギーノリウツギ群落

(相観) 夏緑低木群落、代償植生

本群落は自然植生あるいは代償植物として生育する。1~4 mの夏緑低木植物と0.8 m以下の草本植物から構成する。夏緑低木植物として、ニシキウツギ(富士山麓ではフジサンニシキウツギが多い)、ヌルデ、タラノキ、ヤマウルシ、ノリウツギ、クマイチゴ、ニガイチゴ、モミジイチゴなどのキイチゴ属の植物が混生する。草本層はツル性のクズやハ

ンショウヅル、モミジハグマ、ススキ、イタドリ、イカリソウなどが生育する。

本県では、ヤブツバキクラス域からブナクラス域にかけて広い範囲に分布するが、それぞれの箇所の面積が小さいため植生図には記載できないものが多い。

30. カワラマツバーススキ群落

（相観）多年生草本植物群落，二次草原

本群落はブナクラス域に生育する二次草原である。高さ0.5～1.5 mの草本層，植被率90～95%と高く，ススキが高い被度で優占し，続いてカワラマツバが多い。他に，富士山麓ではカリヤスモドキ，ヤマハギ，ツリガネニンジン，ミヤマイボタ，タチフウロウ，タイアザミ，シモツケ，キオン，トダシバ，ツルウメモドリ，フジザクラ，シシウド，チダケサシ，ヒメシダなどが混生する。

山梨県内の伐採地跡に広く分布する。

31. シバ群団

（相観）短茎イネ科草本植物群落，二次草原

シバが優占する草原は，人為的干渉下に生育する二次草原で，ゴルフ場が主である。

ブナクラス域のシバ群落は，被度・群度5・5のコウライシバの他にシロツメクサ，ワラビ，シバスゲ，ヨモギなども混生する。植生図の中で敷島ゴルフ場，昇仙峡ゴルフ場を牧草地扱いになっているが，これはシバ群団扱い方がよいと思う。

32. 伐跡群落

（相観）伐採跡草本植物群落

ブナクラス域の伐採跡地は，森林伐採後1～2年でヤナギラン群落をつくるのが普通だが，ところにより，クマイチゴ，エビガライチゴなどのキイチゴ類を優占する群落もある。

植生調査表にも示めされているように，ヤナギラン群落は，高さ1.2 m前後のヤナギランを優占する草本層から成り立ち，その他ヨモギ，クマイチゴ，ヤマドリゼンマイなどの草本が割合高い比率で占めている。伐採後の年数にもよるが，バッコヤナギ，ヤシャブシ，ヤマハンノキなどの低木が点在するヤナギラン群落が県内には多く見られる。

ヤブツバキクラス域自然植生

33. モミ-シキミ群集

（相観） 常緑広葉樹を混じえる常緑針葉樹林

モミ-シキミ群集は本県ではモミ群落として在存する。

この群集は高木にモミがかなりの高い被度で生育し、下木にアラカシ、シラカシ等の常緑広葉樹を混じえる林であり、この他シイノキ、イヌシデ、カヤなどが生育する、県の南部では草本層にウラジロ、コシダ等が生える場合がある。この群集は多くは神社や寺院などの林に多く、隣接する林にはスギ、ヒノキなどの植林地が多い。

本県では県南部に見られ、富士川を上って甲府盆地周辺まで点々とその群集が存在するが、現在する林はごく限られたところだけである。

34. サカキ-ウラジロガシ群集

（相観） 常緑広葉樹林

この群集はウラジロガシ、アラカシを主とした林でサカキ、ヒサカキ、イヌガヤ、ケヤキ等が混生する。低木にはナンテン、ハナイカダ、リンボク、草本層にはジャノヒゲ、シユンラン、ナキリスゲなどが多く生える。

本県では富士川に沿った県の南部一帯の山麓部及び神社、寺院等の林として存在する。又県東部の桂川沿いでもごく小規模ではあるが認められる。

35. イロハモミジ-ケヤキ群集

（相観） 林床にヤブツバキクラスの種が生育する夏緑広葉樹林

この群集はケヤキ、イロハモミジ等が高木層として優占し、これにシラカシ、アラカシ、ヤブツバキなどが第2層として生える、低木層にはアオキ、ナンテン、マサキ、アブラチャン、ハナイカダ、ヤマブキ、ガマズミ等が生育し草本層にはオオバジャノヒゲ、ジャノヒゲ、がかなりの被度で生えるが、アオキ、ナンテンなどは県南部と東部の桂川沿いの林には認められるが、甲府盆地周辺の林には認められない。

この群集は本県においては富士川沿岸から甲府盆地周辺の山麓部と県東部の桂川上流域に存在する、主に川辺の急峻な地形とその上下の斜面、山麓の部分などに多く分布する。

36. シラカシ群集

（相観） 常緑広葉樹高木林

この群集は甲府盆地をとりまく山麓地帯と富士川流域の段丘地、それに桂川流域の大月

付近までの段丘地等に発達するものでシラカシが高木層でかなりの被度をしめる林である。

高木層にはシラカシが優占するが、アカマツ、ケヤキ等が混生することがある。

低木層にはシラカシ、エノキ、イロハモミジ、コナラ等が生える、草本層にはアズマネザサ等のササ類が多く生え、他にはシュンラン、ヤブラン、ヨモギ、テイカカズラ等がある。カシ林の発達するところは又人間の生活圏でもあり林として残っているところは現在は神社、寺院の林、旧家の屋敷林、河川沿いの急峻な地域等が多く、これも点在するが、帯状に存在する状況である。

37. イノデータブ群集

（相観） 常緑広葉樹高木林

この群集は本県では最も温暖な南部町、富沢町の主に神社等の林にみられる、これは富士川に沿って温暖な気候が流れ込んで来ておりその条件下で県南部の富沢町、南部町にはタブ、カゴノキ、ヤブニッケイ、ムベなどを混生する林がある。

特に上佐野の井出八幡神社の森は高木にタブ、カゴノキの大木を中心にしてヤブニッケイ、シラカシなどが生え、低木層にはタブ、ヤブツバキ、スタジイ、ムベ、シロダモ、トベラ、草本層にはキチジョウソウ、ヤブコウジ、イノデ、アオキ等で構成されている。

この群集は本県では県最南部の一部にのみ見られるものであり、神社、寺院の林又は急峻な山麓又は河川に沿った地形のところに小規模に存在する。

38. 河辺ヤナギ低木群落（河辺低木林を含む）

（相観） 夏緑低木林

この群落は河川敷や湖沼の岸辺等に生育するヤナギを主とした低木林である。タチヤナギがかなりの優占度をもって生育し、草本層にはヨシ、カナムグラ、ミゾソバ、ヨモギ、スイカズラ、ノイバラ、オナモミ等が生える。

本県においては富士川水系の各河川に点々と出現するが、河川改修などのためかなりこの群落は少なくなっている。又各湖や池の岸の群落も護岸工事などでかなり少なくなっている現況である。

39. クヌギーコナラ群集

（相観） 夏緑広葉樹高木林

この群落はシラカシ群集やウラジログシ、アラカシ群集等の二次林として発達する林であり、県内低山地の人里近い山地はほとんどこの林である。高木層にはコナラ、クヌギが優占し、80%近い植被率である。これにイヌシデ、サワシバ等が混生する。亜高木、低木層にはイロハモミジ、ウリハダカエデ等カエデの仲間が多くコバノガマズミ、トウゴクミツバツツジ、ツクバネウツギ、ヤマハギ、ダンコウバイ等他にもかなりの樹種が生育する。

又県南部や盆地周辺ではシラカシを混生する。草本層にはヘビノネゴザ、サルマメ、センボンヤリ、ナンテンハギ、シュンラン、オヤマボクチ等他に多くの種が見られる。

この群集は二次林として発達したものであり何年に一度かはほとんどの林が人の手が入るために一次的にはヤマツツジ、ガマズミ、ヤマハギ、ススキ、ヨモギ、ヤマウルシ、クサギ等生育する低木林、クサギーアカメガシワ群落に相当する林になるが、何年かして又コナラークヌギ林にもどるくりかえしをしている。

40. 伐 跡 群 落

（相観） 伐採跡地低木群落

クヌギーコナラ林等を伐採すると一次的にこの所にはヤマウルシ、ヌルデ、タラノキ、ナワシロイチゴ、サルトリイバラ、ススキ、コアカソ、ニガイイチゴ、モミジイチゴ、ヤマツツジ、ガマズミ等が繁茂する、これらはいずれ何年かすると又コナラークヌギ林にもどるが、こうした伐採跡地の低木林は、県下低山地の各所に出現する。又ブナクラス域の伐採跡地にはヒメジョオン、イタドリ、ヤマホタルブクロ、ノコンギク、ヨモギ、カワラマツバ、ヤナギラン等他にも多くの草本が生え、ヤナギラン群落に相当する植生が出現する。シラビソーオオシラビソ群落の伐採跡地にはミヤマウラジロイチゴ、クマイチゴ、ヤマハハコ等を主体としたヤマハハコーミヤマウラジロイチゴ群集が出現する。

これらはいずれも県下各地の伐採跡地に見られる群落である。

41. アズマネザサーススキ群集

（相観） 多年生草本群落、二次草原

この群集は県下の山付地帯にある畑地の荒廃、畑と山地の境界部のところ、伐採による跡地等に分布する。特に近年養蚕業の衰退により山地に多い桑園が荒廃し、このあとにアズマネザサーススキ群集が発達しているところが多い。

二次的な草地であるため草本層単層群落であるがまれには低木も混生する場合がある。主にススキ、アズマネザサが70～80%の植被率で生育する。他にはヨモギ、オオバコ、ヤマシロギク、アキノキリンソウ、ノコンギク等多くの草本植物が見られる。

42. シ バ 群 団

（相観） 短茎イネ科草本植物群落、二次草原

シバ群団として本県にあるものはゴルフ場でありこれは人工的に管理された群落である。したがって草丈も3～10cmと低く刈り込まれておりこれ以上のものは認められない。シバは県下ほとんどのゴルフ場がコウライシバであるがシバも一部では使はれている。ゲンノショウコ、ミヤコグサ、ワラビ等何種かの草本が認められるが、これは人工管理のシバ地に進入して来たものである。

43. 路傍雑草群落

（相観） 多年生草本植物群落

この群落は主に農道等の路傍に生育するチカラシバ、チガヤ、イタドリ、ヨモギ、カゼクサ等の群落であるが、生育範囲が道路側面という線上にあるため植生図上には表れていない。

44. ヤマツツジ－アカマツ群集

（相観） 常緑針葉樹林

この群集は高木層にアカマツが優占する林で低木にはネジキ、ヤマツツジ、ミツバツツジ、ヤマウルシ、コナラ、ガマズミ、ツクバネウツギ他多くの低木が生育する。草本層にはワラビ、シュンラン、アキノキリンソウ、コウヤボウキ、サルマメ等が見られる。

この群集は県下低山地にはかなりの面積にわたって存在するが、富士山麓や御岳昇仙峡でこの著しい群集が認められる。しかし自然植生としてのアカマツ－ヤマツツジ群集と植林地においてもこの群集が認められる。したがってはっきり植林地と区別出来る個所はNo 51, アカマツ植林としたが、いずれともしがない個所については示された凡例区分によりヤマツツジ－アカマツ群集とし、自然林と認められる本群集に該当するものは、やはり凡例区分に従いアカマツ群落とした。いずれにしても本県のこの群集はヤブツバキクラスからブナクラス域の広い範囲にわたっており、一部人工も加わっている等複雑な状況下におかれているので明確に区分出来ない地域もある。

45. クズ群落（林縁性ツル－低木群落）

（相観） 林縁つる性植物群落

この群落は県下各所の林縁、又は河川の荒地、植林地の幼木林等に発達する群落である。

クズやカナムグラは生育旺盛であるためこれの繁茂するところには他の植物はあまり見られない、わずかにアズマネザサ、ナワシロイチゴ、ススキ、ヨモギ、アメリカセンダングサ等農地に多い植物が見られる程度である。

この群落は林縁や植林地等であるため植生図上に表される所は少ない。

川辺、湿原、塩沢地、砂丘植生

46. ヨシクラス（低層湿原、セイコノヨシを含む）

（相観） 抽水植物群落

この群落は河川沿いや湖沼の岸などに発達するヨシを主とする群落で条件のよい水辺では2 m以上にもなる。又、近年水稻生産調整で放置された水田がヨシ群落に変わっているところも見られる。

この群落は県下では河口湖、富士川水系の河川、それに放置水田等に存在する。

構成種はヨシ、アメリカセンダングサ、ミゾソバ、オナモミ、他で場所によってはガマが混生するが本県ではガマは少ない。

47. ウキクサ、ヒルムシロクラス

（相観） 開放水域植物群落

この群落は湖沼、灌がい用の貯水池、水田等に発達する群落で、水田中にはヒルムシロ、アブノメ、コナギ、等が水中に生え、ウキクサは水田の条件によっては一面に水面をおぼって水田中の水温を下げるため稲の生育に影響する場合がある。

湖や山地の古い貯水池、沼地などにはウキクサが浮遊している。これらに流れのあるところでは下流に押し流され群落として浮遊することはない。又植生図上には水田として記されるため図上に表されるものは少ない。

48. ツルヨシ群集

（相観） 冠水草本植物群落

この群集は河川に沿って水辺に生育するものでツルヨシ、カナムグラ、アメリカセンダングサ、ミゾソバ他荒地の植物が多く生育するが、ツルヨシが優占している。

本県では富士川水系の大小各河川、人里の川辺にまでかなり多くの河川沿いに生育している。

49. オギ群集

（相観） 冠水草本植物群落

この群集は河川に沿って川辺に発達する草本群落で2～3 mぐらいいなりかなり高い被度で帯状に群落を作る。オギの他マコモ、アメリカセンダングサ、ヨモギ、ミゾソバ等がわずかに混生する。

本県ではオギ群集はツルヨシ群集に続いて分布し、主に富士川水系の大小河川沿いに存在する、しかし近年河川敷の改修が進みオギ群集、ツルヨシ群集とも少なくなっている。

植林地、耕地植生

50. アカマツ植林

（相観） 常緑針葉樹の人工林、二次林

ヤブツバキクラスからブナクラス域にかけて、日当りの良い傾斜地や平坦地に植林あるいは二次林として形成されている高木層にはカラマツ、コナラ、亜高木層にはリョウブ、ネジキ、低木層にはヤマウルシ、レンゲツツジ又はヤマツツジなどが混生する。一般にアカマツ林は日光の透通や良いことから、針葉樹林でありながら下層の植物も多く、コウヤボウキ、オケラ、サルマメなどが、コケ層でもスギゴケなどの蘚類も多い。

本県におけるアカマツ林は、県南部の多雨地帯を除き標高1,000mくらいまで各地に分布し、代表的二次林となっている。アカマツは薪炭や建築用材として利用されるが、防災林や風致林として自然景観を形成する重要なものである。

51. クロマツ植林

（相観） 常緑針葉樹の人工林

県下にはクロマツ植林は極めて少く、面積的にも小さいため植生図には図示されていない。調査表の地点は笛吹川の堤防沿いに植えられたものである。

52. スギ・ヒノキ植林

（相観） 常緑針葉樹の人工林

ヤブツバキクラスからブナクラス域にわけて広く植林されているが、立地的にはアカマツが尾根沿いの陽地に多いのに反し、一般的には沢筋の温潤な場所や多雨地域に多い。植生としては当然のことながら高木層にはスギ、ヒノキが優占し、高い植被率で被うため、林内の照度が低く植生は貧弱である。下層においての木本植物は極端に少く、草本植物も耐陰性の高いシダ類を中心に、ドクダミ、タニタデ、アマチャズルなどが見られる程度で出現数は少い。本県におけるスギ、ヒノキ植林は富士川流域の身延町、南部町、富沢町などの温暖多雨地帯に大面積が植林されているが、近年は用材価格の低迷や労力不足等から枝打ち間伐など手入れ不足が目立っているが、スギ、ヒノキ林は土壌中の保水力が低いことから、国土保全上からも充分な手入れが望まれる。

53. ウラジロモミ植林

（相観） 常緑針葉樹の人工林

ブナクラス域上部から亜高山帯にかけての緩傾斜地に多く植林されており、立地的には

ミズナラ、ブナ、ウラジロモミなどが生育している地域である。県下におけるウラジロモミ植林は植林後の日が浅いため、植生としては、調査表にみられるように高木層を欠くことが多く、低木層にレンゲツツジ、ノリウツギ、サワフタギ、草本層にはノガリヤスなどイネ科植物が多い。植林地は八ッ岳、金峰山、富士山麓にみられる。

54. シラビソ植林

（相観） 常緑針葉樹の人工林

標高 1,500 m 以上の亜高山帯に多く植林されており、ウラジロモミとの混植もある。自然植生のシラビソ林は林床に蘚苔類や地衣類が高い植被率をもっているが、植林地では伐採によりこの植生が破壊された後に植林されているため、下層の植生の多くは伐採後地群落または高茎草原に類する。

本県におけるシラビソ植林は近年になって行われたものが多く、富士山および八ヶ岳の中腹にあり、その殆んどが県有林である。

55. カラマツ植林

（相観） 落葉針葉樹の人工林

標高 1,000 m は付近から亜高山帯にかけて多く植林されている。下層の植物はウラジロモミ、シラベと同様に若令のうちには各種の植物が混生し、種類もやはり、地域によって若干の相異が見られる。カラマツ植林は県南部を除く、県下各地に行れ、面積的にも多く、大部分は県有林である。

56. 落葉広葉樹植林

（相観） 夏緑広葉樹の人工林

現在のところ県下にはない。

57. 外国産広葉樹植林

（相観） 夏緑広葉樹の人工林

治山事業等で若干の植林例があるが面積が小さく図示はない。樹種はニセアカシアが多い。

58. ヤマハンノキ植林

（相観） 夏緑広葉樹の人工林

治山事業等で若干の植林があるが面積が小さく図示はない。

59. 竹 林

（相観） 常 緑 高 木 林

標高 700 m 以下の地域において、多くは屋敷林として植生が見られるが、県南部の南部町、富沢町においては筍の生産目的での利用もされている。樹種としてはマダケ、モウソウチクが多いが県北部にはハチクもある。

林内の植生としては、シラカシ、ヒサカキ、アオキ、テイカカズラ、などヤブツバキクラスの代表的植物が混生する。

竹林の多くは屋敷林としての存在であるため個々の林分としては面積が小さく点在しているが、竹材や筍の利用は農業経済上有益であるほか景観維持上も保存が望ましい。

60. 常 緑 果 樹 園

（相観） 常 緑 広 葉 樹 林

常緑果樹としては、ビワ、柑橘類であるが多くの庭木として栽植である。園地としては増穂町においてユズが見られる程度である。

61. 落 葉 果 樹 園

（相観） 落 葉 広 葉 樹 林

甲府盆地およびその周辺を中心に県下に約 1,300ha に及ぶ落葉果樹がある。樹種はブドウが最も多く、次いでモモ、スモモ、ウメのほか各種の落葉果樹が栽培されている、ブドウは勝沼町、甲府市、モモは一宮町、白根町に栽培が多い。しかし一般的には数種の果樹が混在して産地化されている。

62. 桑 園

（相観） 落 葉 広 葉 低 木 林

桑園は県下全域にみられるが、双葉町を中心とした茅ヶ岳山麓地帯、甲府盆地東南部の豊富村を中心とした曽根丘陵地帯に集団園地が多い。桑園は近年減少しつつある。

63. 茶 園

（相観） 常 緑 広 葉 低 木 林

富士川流域の温度多雨地域を中心に茶園造成が行われている。その他甲府盆地北部の敷島町、県東部の上野原町等にも僅であるが園地造成がされ、地域の主幹作目となっている。傾斜地が多いため土壌保全的な役割も果している。

64. 畑地雑草群落

（相観） 耕作畑地雑草群落

いわゆる普通畑として耕地分類されているもので，集落の存在するところには必ずといってよいほど県下各地に分布している。草種は作付されている作物の種類，耕作管理の度合によって種類や量は変化する。放任状態に近くなるほどヒメムカシヨモギ・オオアレチノギク群落に近くなり，イネ科やキク科雑草が多くなる。

66. 牧草地・（人工草地）

（相観） 草 原

採草または放牧地として富士西麓，八ヶ岳南麓に広い面積の牧草地ある。その他地域においても乳牛または肉牛の飼養農家とともに点在している。

67. 水田雑草群落

（相観） 水田雑草群落

水田は標高1,000 m近くまで，県下全域に分布している。近年宅地化や果樹園などに転換され減少しつつある。植生はウリカワ・コナギ群集に代表されるいわゆる水田雑草がみられる。

68. 休耕田雑草群落

（相観） 水田放棄地雑草群落

休耕田は県下各地にみられるが，多くは一時的なものであり，面積的にも点在するため植生図に表わされることは少い。

そ の 他

69. 市 街 地

都市部おける住宅地，主要道路沿の住宅密集地である。

70. 緑の多い住宅地

公園，墓地樹木が多くやや広い住宅地である。

71. 工 場 地

工場密集地，大規模工場を工場地帯とした。

72. 造成地、裸地

造成地・山砂利などの採石場などである。

73. 開 放 水 域

河川，湖沼など植被の見られない部分を開放水域とした。

74. 自 然 裸 地

山地などで土砂の崩壊により裸地となったもの，および河川の中州で植被のない場所である。



1

コケモモハイマツ
群集
(北 岳)



3

オヤマノエンドウ
ヒゲハリスゲ群集
(北 岳)



6

タカネヤハズハハコ
アオノツガザクラ
群集
(北 岳)



7

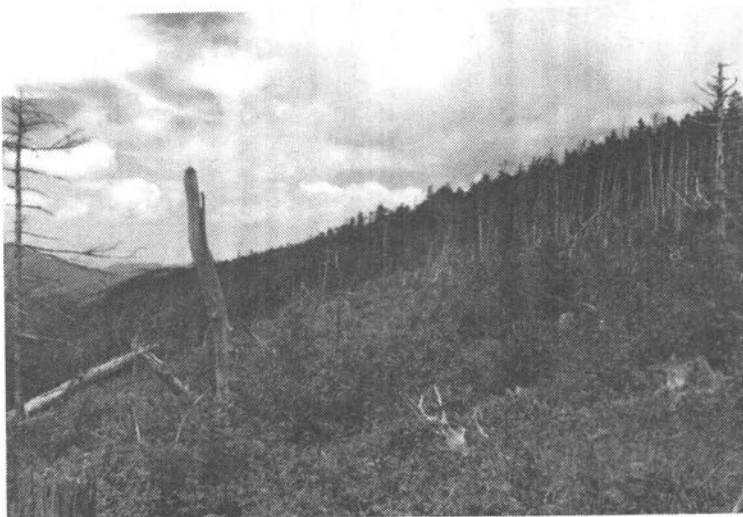
シラビソ-オオシラ
ビソ群集
(富士山精進口登山
道)



8

カラマツ群落
(富士山奥庭)

11



伐跡群落
(秩父山地)



9

ミドリユキザサダ
ケカンバ群落
(北岳大樺沢)



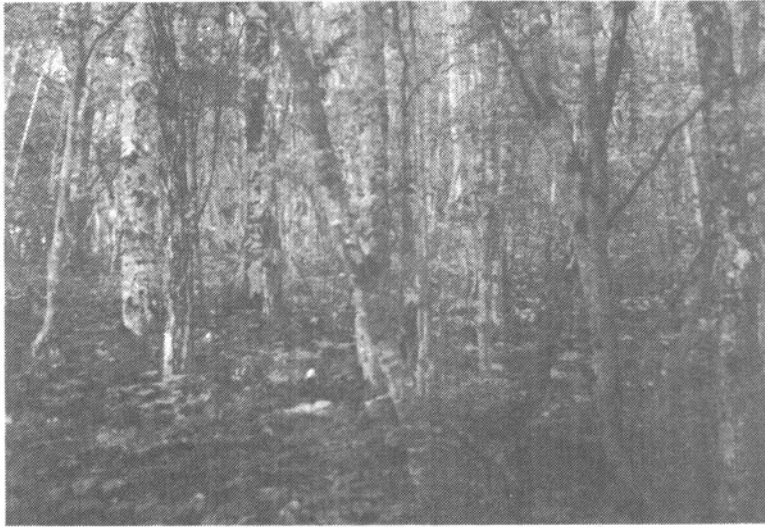
13

ヤマボウシーブナ群
集
(十枚山)



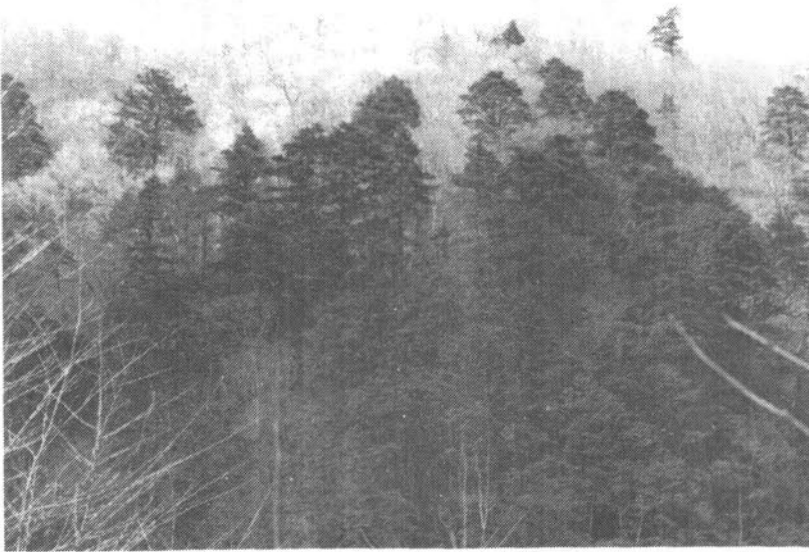
14

イヌブナ群集
(七面山)



15

オオモミジガサーブ
ナ群集
(御坂山地, 黒岳)



16

ツガーコカンスゲ群
集
(小金沢)



17

ウラジロモミーコメ
ツガ群落
(三ツ峠)



19

アカマツ群落

(北巨摩郡白州町)



20

ミヤマクマワラビー
シオジ群集

(小金沢)



22

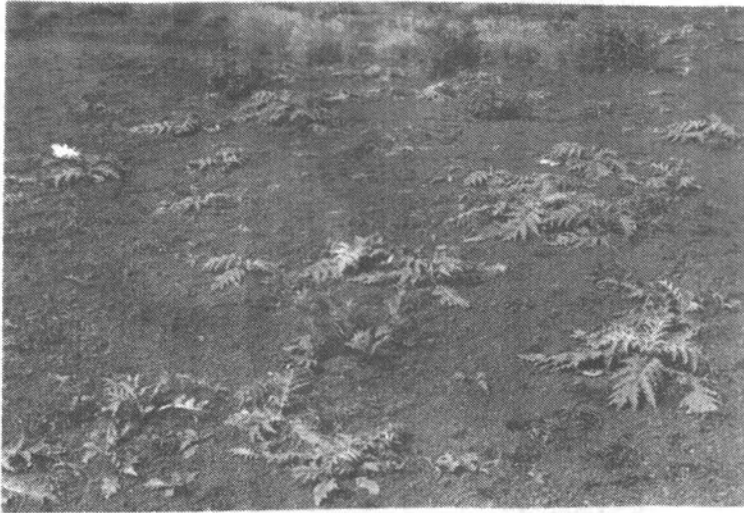
ドロノキーオオバヤ
ナギ群集

(南アルプス野呂川
上流)



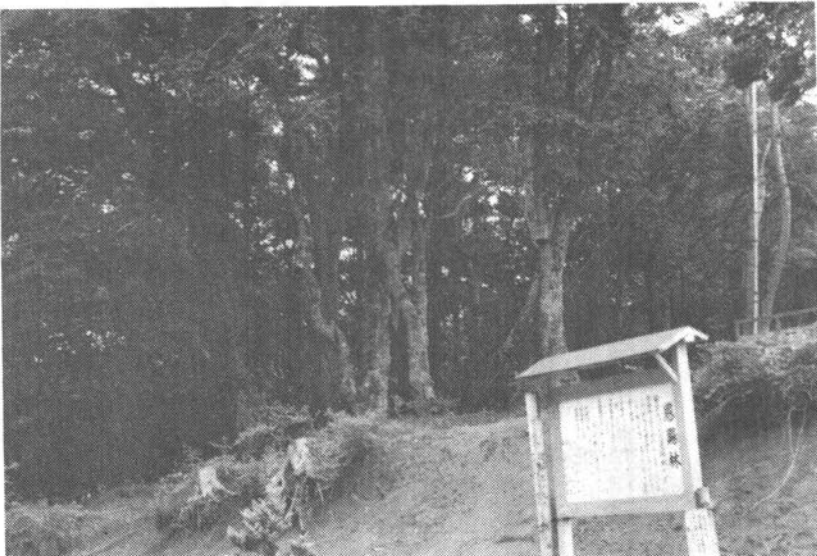
23

フジアカショウマー
シモツケソウ群集
(南大菩薩)



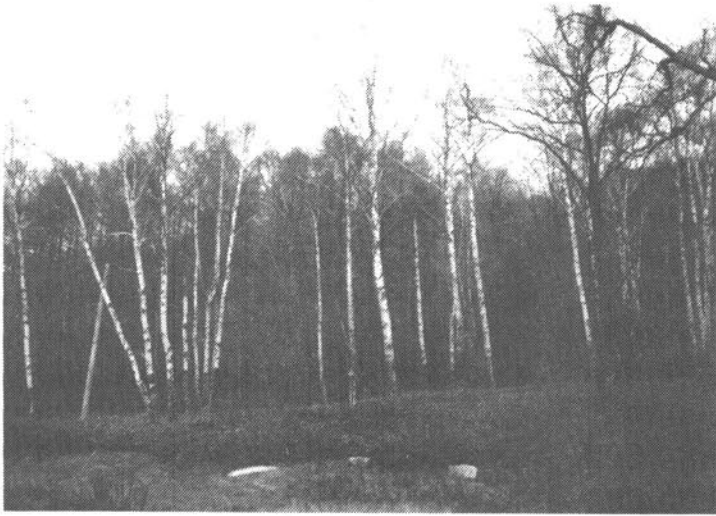
24

フジアザミーヤマホ
タルブクロ群集
(籠坂峠)



27

クリーミズナラ群落
(小金沢山地)



28

レンゲツツジ-シラ
カンパ群集
(金峰山麓)



36

シラカン群集
(甲府盆地南部山麓)

39



クヌギ-コナラ群集
(北巨摩郡須玉町)



55

カラムツ植林

(金峰山麓)



66

牧草地

(東山梨郡牧丘町)



54

シラビソ植林

(富士山馬返)



ヒノキ・シノブカグ
マ群集
(富士山青木ヶ原)

6. 資 料 リ ス ト

番号	筆 者 名 (発 行 者 名)	発 行 年 (西 暦)	資 料 名
1	秋 山 樹 好 他 文 化 庁	昭 47 (1973)	天然記念物緊急調査植生図
2	浜 野 一 彦 他	昭 45 (1970)	山梨地質誌, 山梨県
3	林 弥 栄	昭 44 (1969)	有用樹木図説, 誠文堂
4	前 田 禎 三	昭 26 (1951)	ヒノキ林の群落組成と日本海要素について 演習林報告 8: 21-44
5	前 川 文 夫	昭 24 (1949)	日本植物区系としてのマキネシア, 植物研 究雑誌 24: 91-96
6	松 浦 正 郎	昭 41 (1966)	ハコネコメツツジの分布と群落, ハコネコ メツツジ調査報告 1: 6-18
7	宮 脇 昭 (編)	昭 42 (1967)	世界との比較における日本の植生原色現代 科学大事典 3, 535 pp. 東京
8	宮 脇 昭 浜 田 丈 夫 菅 原 久 夫	昭 42 (1967)	富士山南斜面 (静岡県側) の学術調査報告 書, 静岡
9	宮 脇 昭 奥 田 重 俊 井 上 香世子	昭 50 (1975)	埼玉県南東部の植生, 埼玉県

番号	筆 者 名 (発 行 者 名)	発 行 年 (西 暦)	資 料 名
10	宮 脇 昭 奥 田 重 俊 他	昭 5 1 (1976)	東海地方の潜在自然植生図, 横浜国立大学 環境科学センター植生研究室
11	宮 脇 昭 菅 原 久 夫 浜 田 丈 夫	昭 4 6 (1971)	富士山の植生, 富士山総合学術調査報告書, 東京
12	宮 脇 昭 他	昭 5 1 (1976)	長野県の植生図, 植物社会学的研究 4, 長 野
13	大 場 達 之	昭 4 4 (1969)	日本の高山荒原植物群落, 神奈川県立博物 館研究報告 1 (2), 横浜
14	鈴 木 時 夫	昭 2 7 (1952)	東亜の森林植生, 古今書院, 東京
15	植 松 春 雄	昭 2 6 (1951)	フオッサ・マグナのもつ植物分類地理学的 意義, 植物研究雑誌 2 6, 東京
16	大 井 次三郎	昭 5 0 (1975)	日本植物誌, 至文堂, 東京
17	遠 山 三樹夫	昭 4 1 (1966)	富士山の亜高山広葉樹林, 富士山の森林植 生第 V 報, 北大農邦文紀 6 (1), 札幌
18	植 松 春 雄	昭 4 2 (1967)	南アルプスの植物, 井上書店 東京
19	山 崎 敬	昭 3 4 (1959)	日本列島の植物分布, 自然科学と博物館 26, 東京

番号	筆 者 名 (発 行 者 名)	発 行 年 (西 暦)	資 料 名
20	山 崎 敬 植 松 春 雄	昭 3 8 (1963)	赤石山脈北部の植生 (1 - 2) 植物研究雑誌 3 8, 東京
21	中 込 司 郎	昭 5 6 (1981)	山梨の樹木
22	宮 脇 昭 鈴 木 邦 雄 藤 原 一 絵 他	昭 5 2 (1977)	山梨県の植生, 山梨県

7. 調査担当者名簿

氏 名	所 属	分 担
植 松 春 雄	山梨学院短期大学	総括責任者
中 込 司 郎	敷島町役場	総括事務局、調査員 60,61年
大久保 栄 治	甲府市立北東中学校	事務局、調査員 59,60,61年
平 賀 幸 三	敷島町役場	事務局
秋 山 澄 延	南部町立睦合小学校	調査員 5 8 年
望 月 一 二	身延町立下山中中学校	〃 5 8 〃
今 村 正 己	南巨摩郡教育事務所	〃 5 8 〃
渡 辺 義 彦	南部町立栄小学校	〃 5 8 〃 (班長)
小 林 岳	大月市文化財審議委員	〃 5 9 , 6 0 年
原 忠 雄	山梨県果樹試験場	〃 6 0 , 6 1 年(班長)
市 川 重 徳	県立東高等学校	〃 5 9 〃
磯 田 進	昭和大学	〃 5 9 〃
浅 川 一 造	甲府市社会教育指導員	〃 6 0 , 6 1 〃(班長)
桜 井 八 州 彦	韭崎市立穂坂小学校	〃 6 0 , 6 1 〃
蘆 原 桂	甲府市立玉諸小学校	〃 6 0 , 6 1 〃
村 山 力	山梨県石和土木事務所	〃 6 0 , 6 1 〃
山 田 一 郎	明野村立明野小学校	〃 6 0 , 6 1 〃
大 石 豊	河口湖ロッヂ支配人	〃 5 9 〃
鈴 木 憲 仁	山梨大学附属中学校	〃 6 0 〃

